

# 算命学中庸

## 【初年】 38回目

38回目の授業はこのページからです。

授業科目           【陰占宿命】

【初年】 38回目 【陰占宿命】 01

### □ 陰占宿命 (いんせんしゆくめい)

38回目の授業は、少し「陰占」についての学びです。

「陽占」つまり人体図には〔主星〕〔第一命星〕〔第二命星〕〔第三命星〕〔第四命星〕という五つの場所があります。

人体図の〔主星〕は自分の場所、〔第一命星〕は配偶者の場所、〔第二命星〕は目下・子供の場所、〔第三命星〕は友人・兄弟の場所、〔第四命星〕は親・目上の場所と決まっています。

「陽占」つまり人体図の観方をやりましたときに……、真ん中は〔主星〕で自分の場所、〔第一命星〕は配偶者の場所、このように人体図も人物の場所は決まっています。という話を少し致しました。

⇒「陰占」の宿命は、人物の場所が決まっています。

〔たとえば〕下記のような宿命があるとします。

宿命（1）

日	月	年	
干	干	干	
支	支	支	
乙	癸	甲	
未	酉	申	

甲申は年干支

癸酉は月干支

乙未は日干支

}

です

陰占宿命は、人物の場所が決まっている

年・月・日の干支で「宿命」をあらわします。

年月日の3つの時間のなかでは、年が一番長いです。

年月日のなかで、年が一番長いということで、年干支のことを『最大時空間』といいます。

「甲申」年干支 — 最大時空間 (さいだいじくうかん)

「癸酉」月干支 — 中時空間 (ちゅうじくうかん)

「乙未」日干支 — 最小時空間 (さいしょうじくうかん)

自然界のなかにおける **年・月・日** という時間の単位は、**年** が一番長い時間の単位になりますので、「年干支」は『最大時空間』に位置します。

**月** は、中間の長さですから『中時空間』という名称が付いています。

「月干支」は『中時空間』に位置します。

**1日** という時間単位は、1番短い時間の単位なので『最小時空間』といいます。

「日干支」は『最小時空間』に位置します。

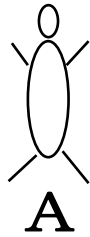
実は——この考え方を基にして、宿命の人物の場所が決まっているのです。

ご一緒に考えて頂きながら……説明していきます。

ねんかんし さいだいじくうかん  
☞ 年干支 — 最大時空間はつぎのように考えます。

### 「年干支」

ここで示す宿命の人物を、仮にAさんとしします。

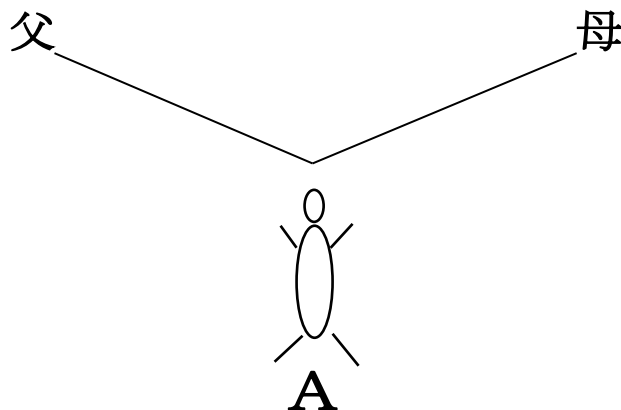


先祖 (1)

このAさんが、この世に生まれてきたという事実がある  
とすれば、このAさんには両親がいるはずです。

両親がいなければ、この世に生れていません。

Aさんがこの世に生れてきたという事実からしまして、  
Aさんの父と母に当たる人物も、この世に存在していた  
という証拠であるはずです。



先祖 (2)

このことは、どなたにもおなじことがいえるはずです。  
Aさんという人間が、この世に生まれてきました——。  
という事実からして、このAさんの、父にあたる人と、  
母にあたる人が、1人ずつこの世に存在していたという  
証拠になるはずです。

多くの人達のなかには「私の父は誰なのかわからない」  
という人も、世の中にはおられるでしょう。  
あるいは「お母さんと生き別れで、母と会ったこともあ  
りません」そういう人もおられるでしょう。

かり  
仮に、父親がどこの誰だかわからない……という場合で  
あっても、本人の父親は、必ず、この世に1人だけ存在  
しているはずです。

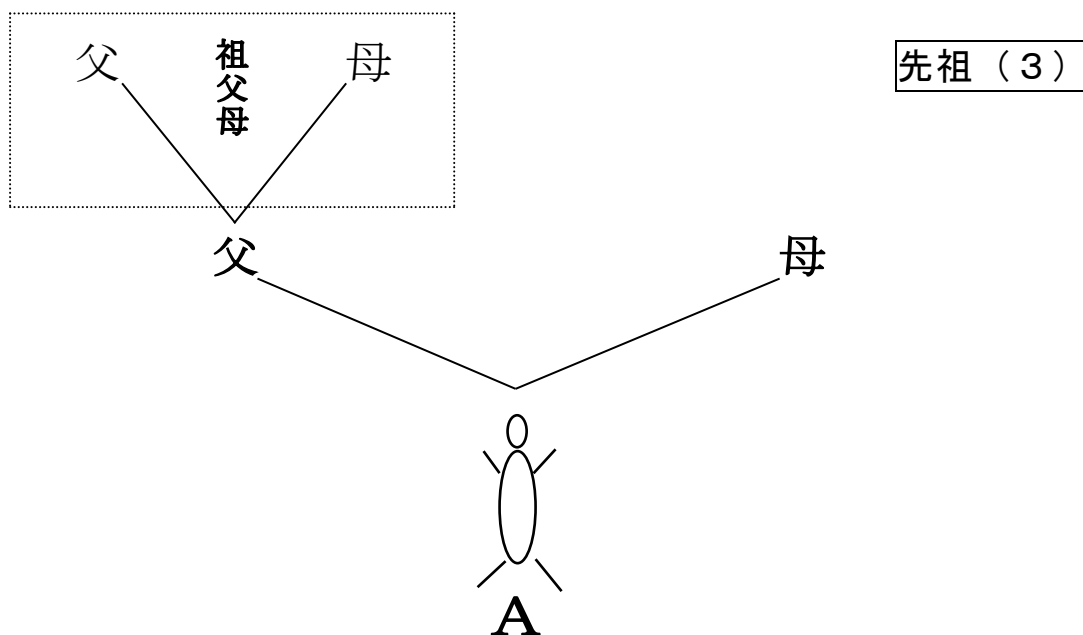
「その父親が<sup>いま</sup>現在、生きているのかどうか、それはわか  
りません」と、〇〇さんがいっても、〇〇さんの父親の  
存在がなければ、〇〇さんは生れていません。

〇〇さんが、<sup>いま</sup>現在生きているという事実からして、父親  
も、母親も存在していた。ということはいえるはずです。

Aさんの話へもどします ➡

そうしますと、**A**さんの父にあたる人物がこの世に存在していたということは、そのまた、父と母にあたる人物も、この世に存在していたはずです。

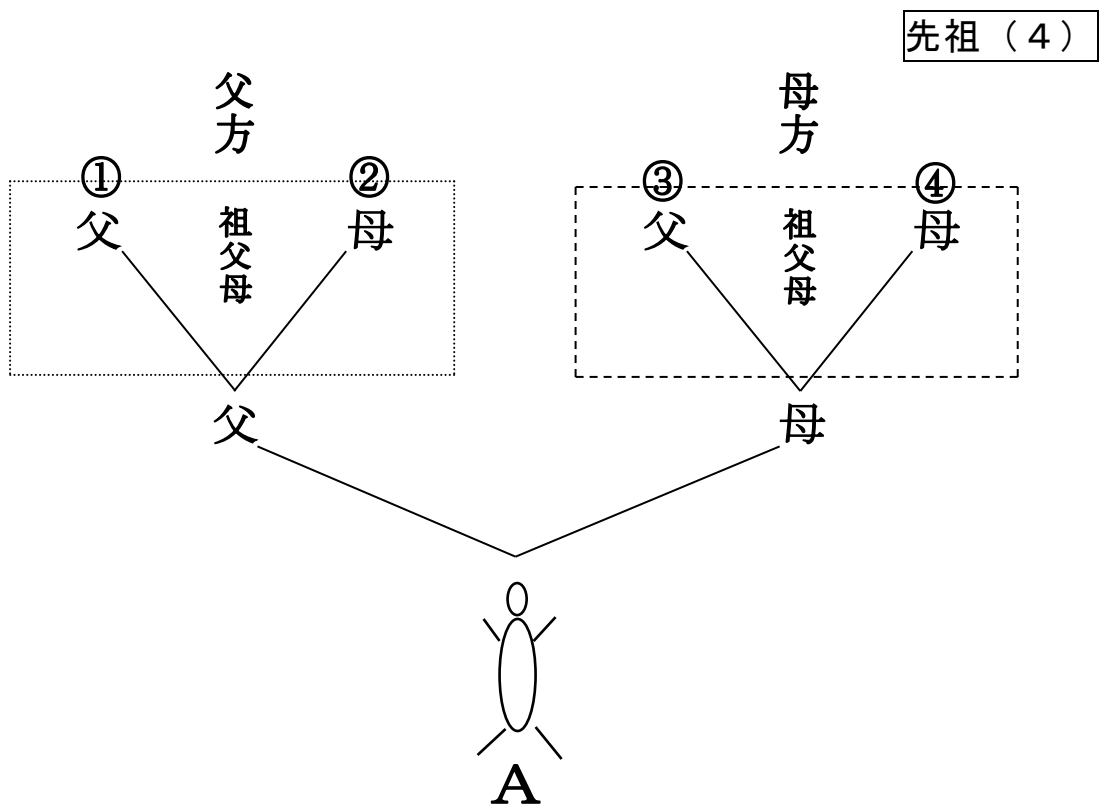
つまり、**A**さんの祖父母です。



**A**さんのおじいさん・おばあさんに当たる人物が、生存しているのか、過去の人になったのかわかりませんが、確かに存在していました。それゆえに**A**さんは生まれてきたわけです。

そうしますと、**A**さんの母親に当たる人も、自分だけのチカラで、この世に生れてくることは不可能ですから、

Aさんの母親にも、母が存在したことになりますから、  
 母親にも、両親に当たる人物がこの世に存在していたと  
 いう事実につながっていくはずです。

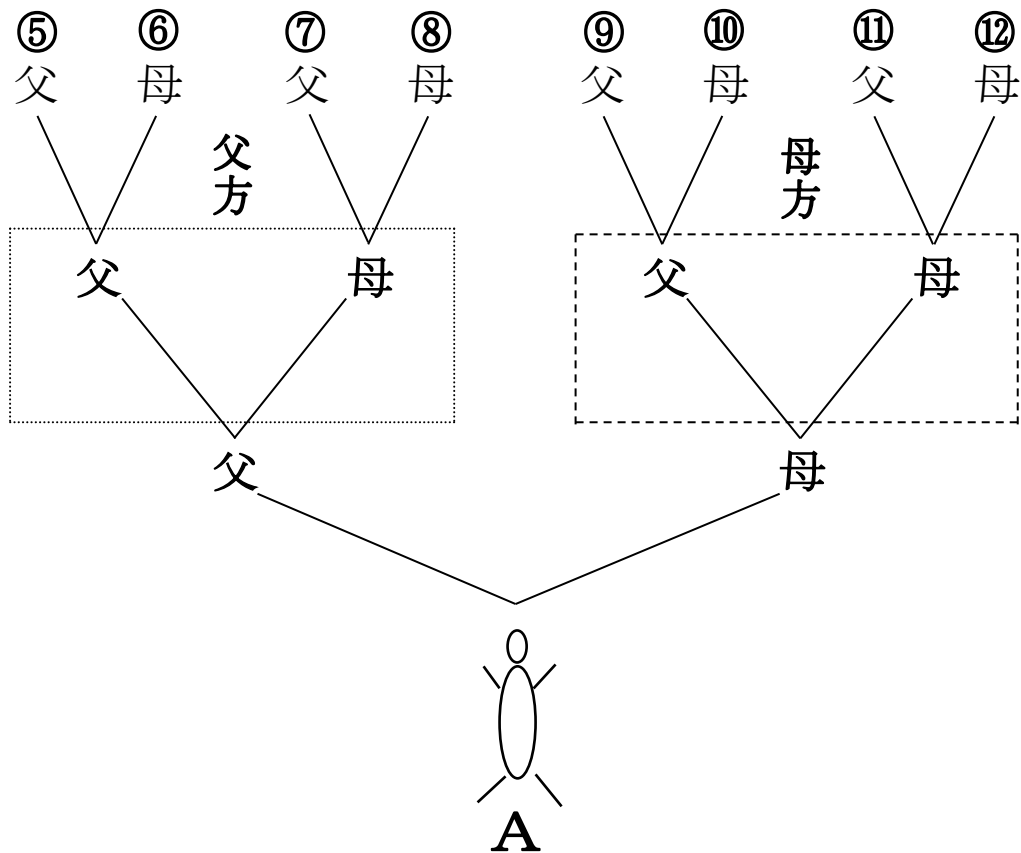


本人のAさんからみて、おじいさん・おばあさんに当たる人物は、4人いるわけです。

このことはAさんに限らず、どの人にでもいえます。

父方のおじいさんが、この世に存在していましたという事実からして、そのおじいさんの父⑤と母⑥に当たる人物も、この世に存在していたはずです。 ➡

## 先祖（5）



当然、父方のおばあさんの両親に当たる⑤と⑥がいたわけです。Aさんがこの世に存在している。あるいは生まれて来たという事実からして、このようにいえるはずです。Aさんからみれば、父方の⑤⑥⑦⑧は曾祖父母の代に当たります。母方の⑨⑩⑪⑫も4人も、曾おじいさんと曾おばあさんです。

この祖先にあたる人達がどのような人物であっても……

⑤⑥⑦⑧ ⑨⑩⑪⑫ というように合計8人いるわけです。



祖先がこの<sup>あた</sup>辺りまで来ると、8人が、どこの誰なのか、よくわからないという人が、多くなってくるかも知れませんが、

名前がわからなくても、曾おじいさん・曾おばあさんがいなければ、この世にAさんは生れて来ていませんから、必ず、この人達は存在していたはずですよ。

そして、曾おじいさんが、この世にいたということは、曾おじいさんの両親に当たる人もこの世にいないとすれば、曾おじいさんは生れて来れないわけですから、その両親もいたはずだということになります。

この曾おばあさんの両親も、この世にいないとすればならないですよ。

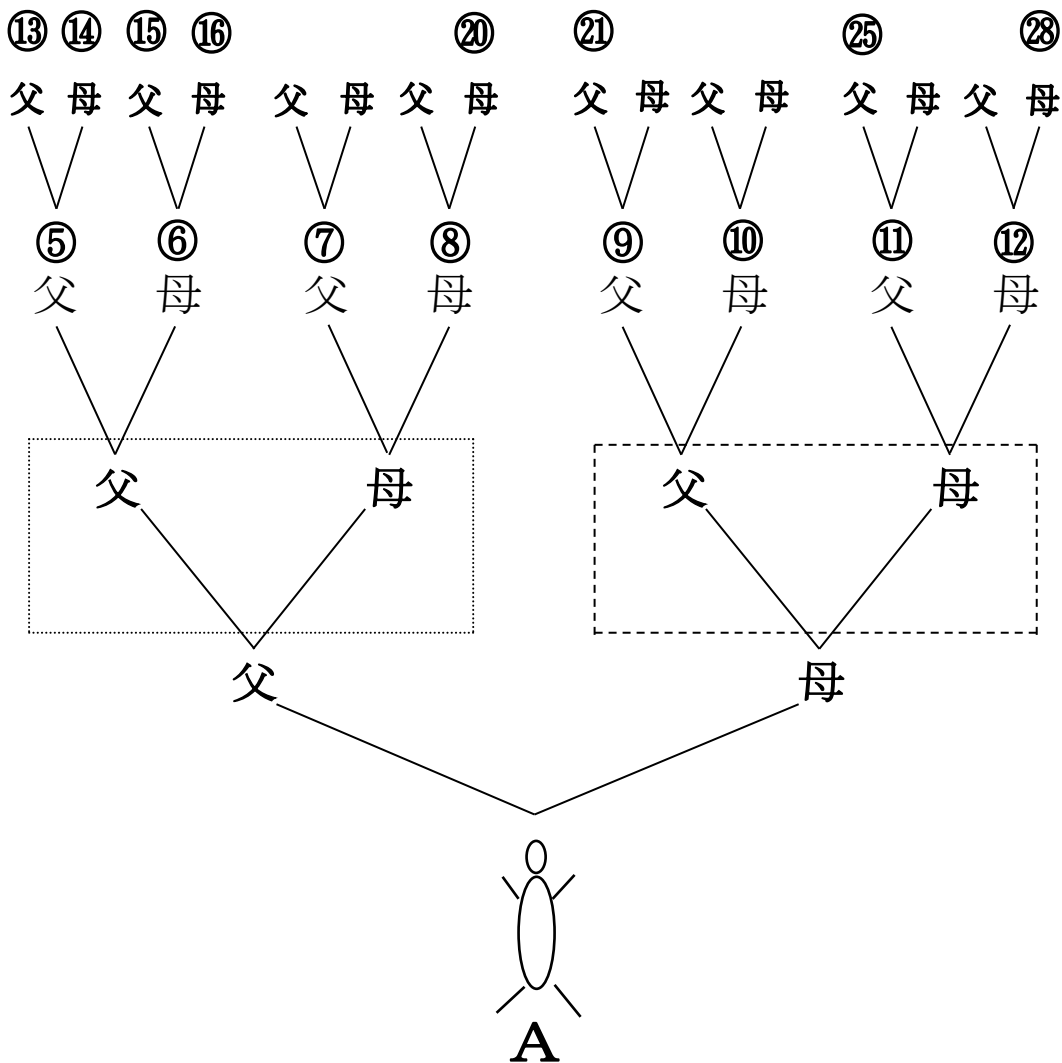
それぞれ、必ず、両親が存在してなければ、この世には生れていないですよ。

ここまで来ると、Aさんの曾曾おじいさん・曾曾おばあさんに当たる代は、全部で16人いることになります。

これはどこまでやっても切りはないのですが、➡

宿命(6)として、28人まで書きました。

先祖(6)



仮に、40代先祖をさかのぼっていきますと、先祖の数は、1兆人になります。

40代 ⇒ 1兆人

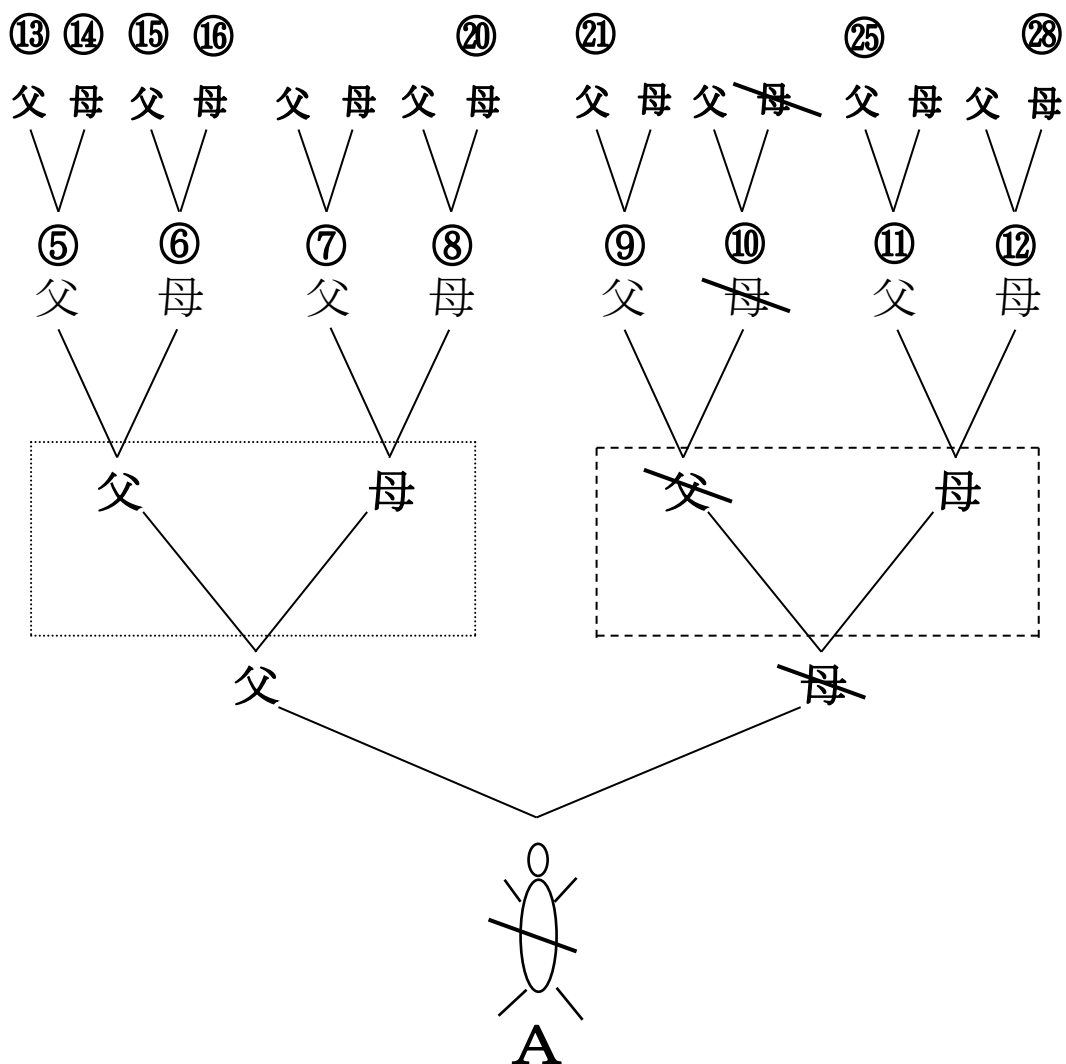
1兆人の自分の先祖の代が出てきてしまうわけです。

そんな昔に、地球上に1兆人の人口があったはずはないですし、あまりにも多すぎます。

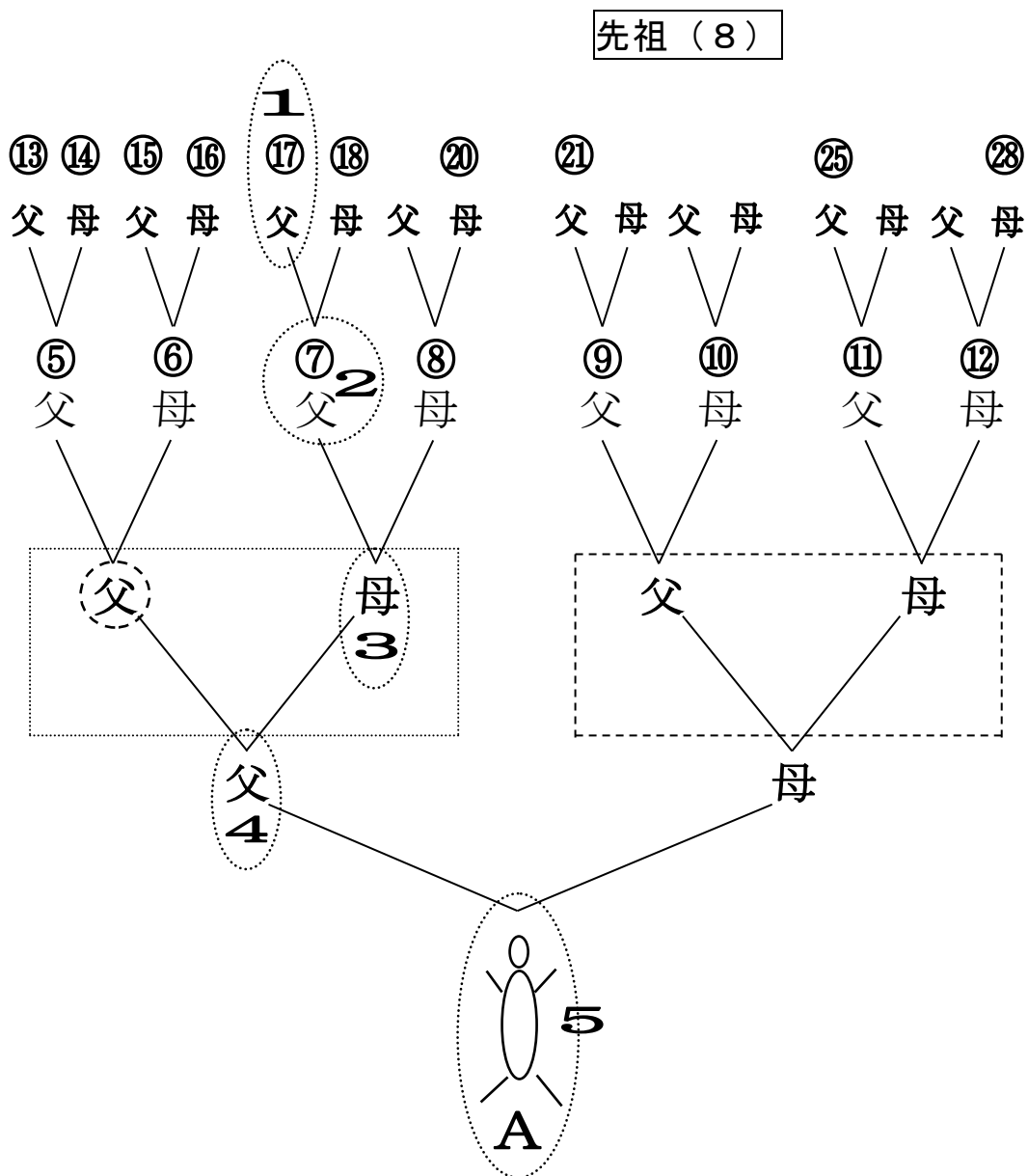
その理由は、後でチョット説明しますが、ここでいえることは、Aさんというたった1人の人間がこの世に生れてくるためには、これだけ膨大な数の先祖が必要だということです。

**宿命(8)** のなかの、どの人でもいいのですが、仮に、<sup>かり</sup>曾曾おばあさんがこの世に生れて来なかったら、その人の子供であるこの人も、この世に生れて来れません。

先祖(7)



当然、どんなに膨大な数の先祖が、存在していたとしても、このなかの、たった1人でも欠けたら、Aさん生まれていないことになるわけです。



あるいは **1** ひいひいおじいさんが、となりのひいひいおばあさん **18** ではなくて、別な女性と結婚していたら、この夫婦の間に生まれてくる **7**父 **2** は、まったく違う

人間として生まれてきたはずです。

⑦父**2**が、⑧の女性ではなくて、別の女性と結婚していたら、母**3**は生まれて来ないですよ。

母**3**の母親なり父親が違う人と結婚していたら、その子供、つまり母**3**は、まったく別の人間になって生まれていたはずですよ。

母**3**が別の人間になっていたら、この人の子供である父**4**は別な人間に生まれていたかも知れないわけですよ。

父**4**が違う人間だったら、Aさん**5**も、まったく別な人間として、この世に生まれて来たはずですよ。もしかすると、生まれて来なかったかも知れないですよ。

子供が「お母さん、なんでお父さんと結婚したの……」  
といたりする話を聞きますけど、自分のお母さんが別の男の人と結婚していたら、自分（子供）は生まれていなかったですよ。

もし、子供の両親のどちらかが、別の人間であれば、たとえ生まれるにしても、性格も違えば、当然、宿命も違いますし、性別すら違っていたかも知れないわけです。

**A**さんという人間が、この世に生まれて来たということは、この先祖の組み合わせであったから、**A**さんという人間が生まれてきたのです。

この組み合わせのなかに、たった一人でも別な人間が混じっていたら——別な言い方をすれば、どこかの代で、別な人間に代わってしまっていたら、**A**さんという人間は生まれていなかったはずです。

**A**さんがこの世に生まれて来るためには、これだけ膨大な先祖が必要だったということです。

**A**さんの背後には、膨大な先祖が存在していた、そういう意味になるわけです。

それで——再度——宿命を書きなおしました ➡ **宿命(2)**

日 干 支	月 干 支	年 干 支
乙	癸	甲
未	酉	申
		↓ 先 祖

2ページの 宿命(1) とおなじです宿命(2)

どなたでも、この世に生まれて来るためには、その背景に、先祖(8)のように、膨大な数の先祖が必要です。

そのなかの一人でも欠けたら、宿命(2)の人は、現世に生まれて来ていないわけですから、宿命には先祖が影響しているはずである。と考えたのです。

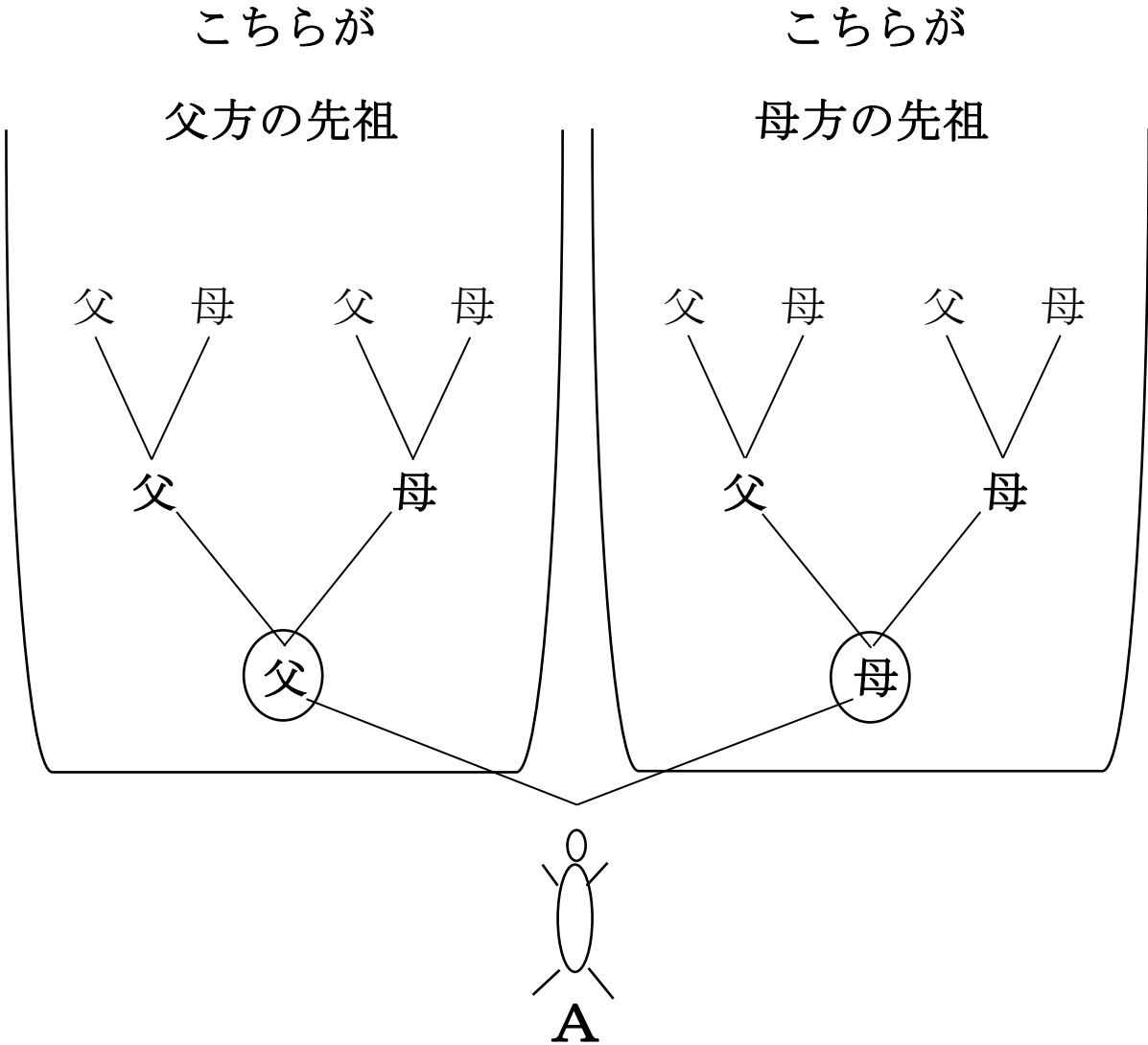
そうしますと、膨大な数の先祖を包括できる場所は……年干支の「最大時空間」であるといえるわけです。

このような理由で、「年干支」を先祖の場所と決めました。自分は先祖から、どういう運気の影響を受けているとか、あるいは、自分は先祖から、どのような因縁を受け継いでいるのか、もらっているのか、そういう姿を観る技法があります。その技法は「年干支」を先祖の場所として占いをしていくようになります。

一般的には、先祖といいましても、これだけ膨大な数の先祖がいると、何代も<sup>さかのぼ</sup>遡れば、どこの誰だか、わからないような人達が、たくさん含まれてしまうのです。

それで、今度は、つぎのような考え方を当てはめます。先祖は、大きく二つに分けることができます。つまり、母方の先祖と、父方の先祖です。

先祖（9）





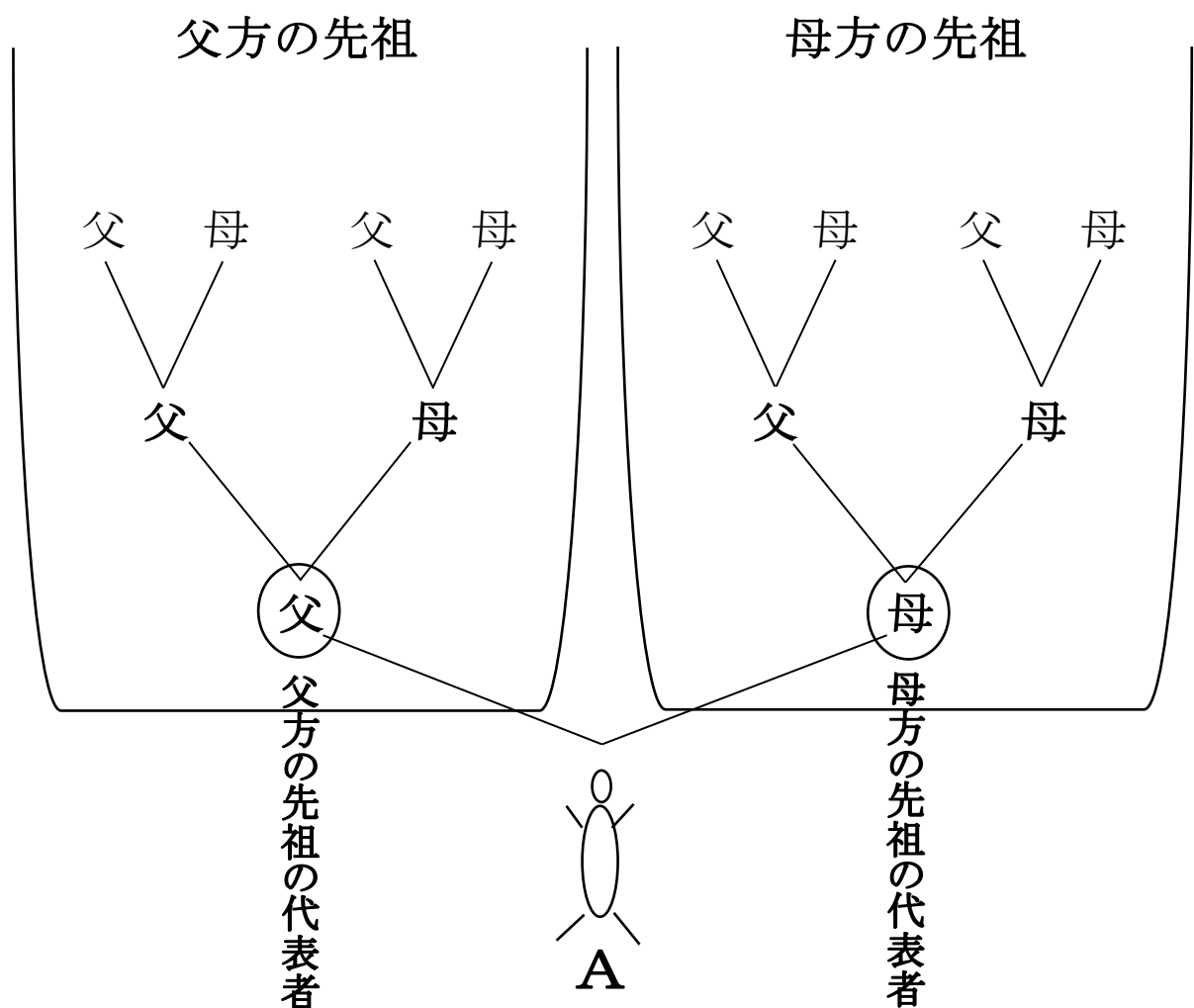
どんなに数が多くても **先祖(9)** の図式で、父方の先祖と、母方の先祖、そのどちらかに分けられるはずです。

このときに、自分にとって、直接つながりのある先祖は、このなかで、父 と 母 だと考えたわけです。

つまり、自分を直接生んでくれた、あるいは育ててくれた父親と母親が、自分にとっては、もっとも身近な先祖であるはずです。

自分から見れば、『父は父方の先祖の代表者』と考えることができるわけです。

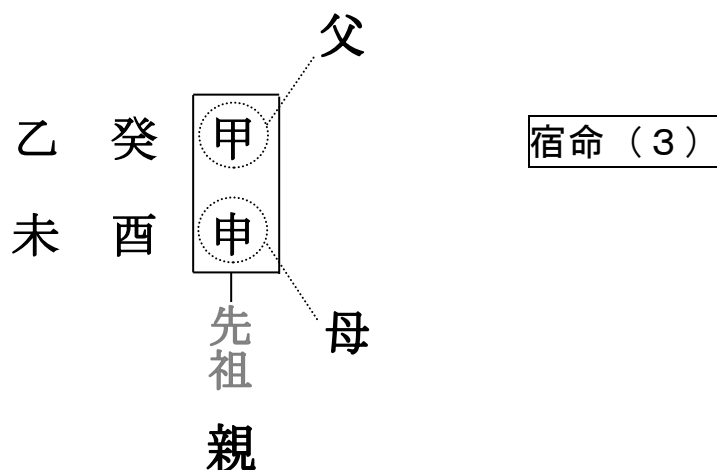
**先祖(10)**



父方の先祖だけでも、ものすごく膨大な数の先祖がいるでしょうけど、どんな膨大な数の先祖がいても、父方の先祖はすべて父親を通して、Aさんとつながりをもっています。ゆえに、父方の先祖の代表が父親になります。

おなじく『母親は母方の先祖の代表者』だと考えます。そして、陰陽の法則で〔父は陽〕〔母は陰〕になります。〔男は陽〕〔女は陰〕といってもよいです。

父と母では、父が陽であり、陽のほうに主体性がある。上と下ということでは、陽が上に来るという考え方をしています。(水は上から下へと流れます)



「年干支」は、先祖の場所といいましたが、言葉<sup>か</sup>を換えると、ここは親の場所でもあるのです。

**宿命(3)** の年干支は「甲申」という干支です。

天干の「甲木」と 地支の（申金）というふうにして……

「干」と（支）を分割して考えるときは、「年干」を**父親**、  
（年支）を**母親**というように、「干」と（支）それぞれに  
人物を当て嵌<sup>は</sup>めて、観ていくようになります。

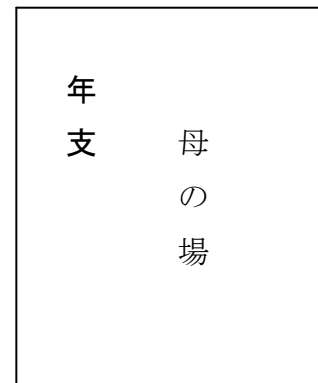
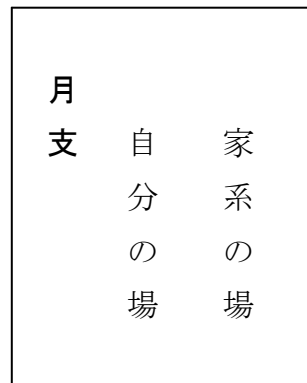
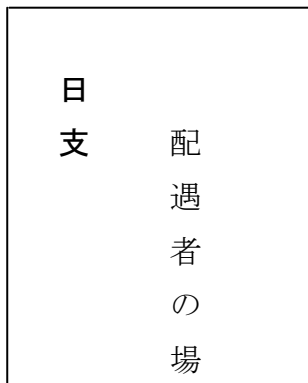
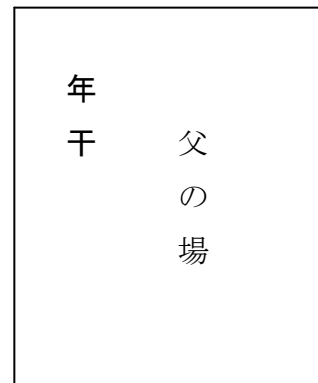
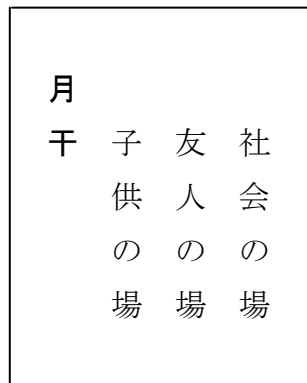
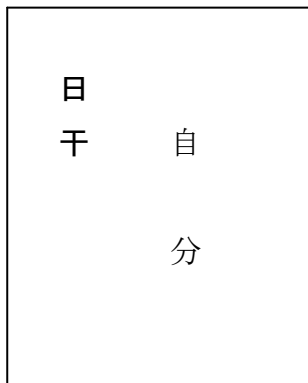
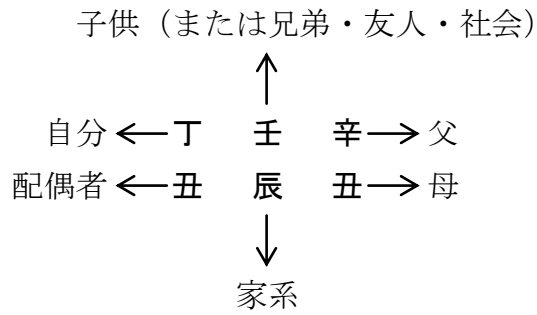
年干支は先祖の場所ですけど、ここは親の場所でもある  
のです。

さらに独立して観る場合は、上の年干が父親、下の年支  
を母親の場所として占いをします。

🔍 「年干支」「月干支」「日干支」に配置されている人物を表した図です。

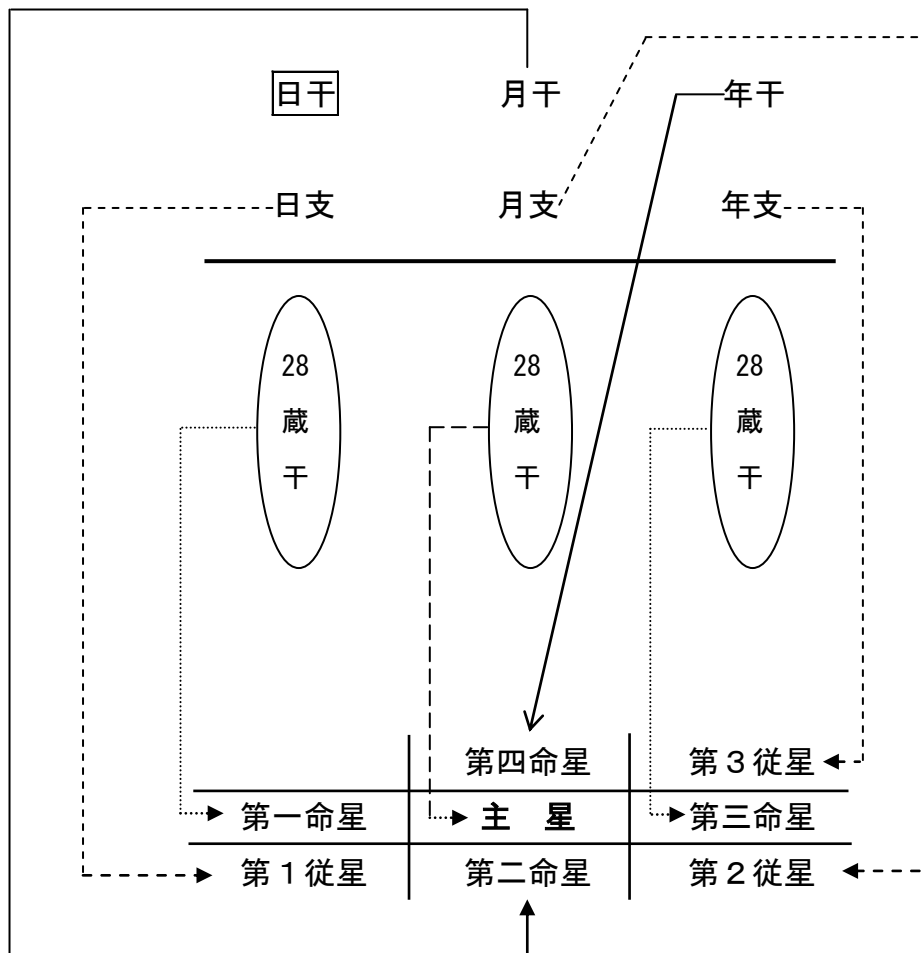
資料【陰占宿命】

本科1



🔍 陰占「年干支」「月干支」「日干支」から、〔十大主星〕の星に直したときに、人体図のどの場所に配置するのかを表した図です。

星の変換（陰占から陽占）



	年 干	年 支
日支の蔵干	月支の蔵干	年支の蔵干
日 支	月 干	月 支

☞ 話をもどします。(19 頁の続きです)

実際に占いをするときには、「年干支」を『先祖の場所』と位置づけて観るよりも、20 ページの図に記載されているように、「年干支」を『親の場所』と位置づけて観るほうが多いです。

具体的には、年干は父親、年支は母親として観る場合のほうが多いです。☞ 20 頁の図を参照ください

☞ さて、先祖を40代遡ると先祖の数が一兆人になってしまいます。[その理由は後で説明しますと、11 ページに書きました]数字の上では、そういう数になってしまうのですが、あまりにも多すぎます。

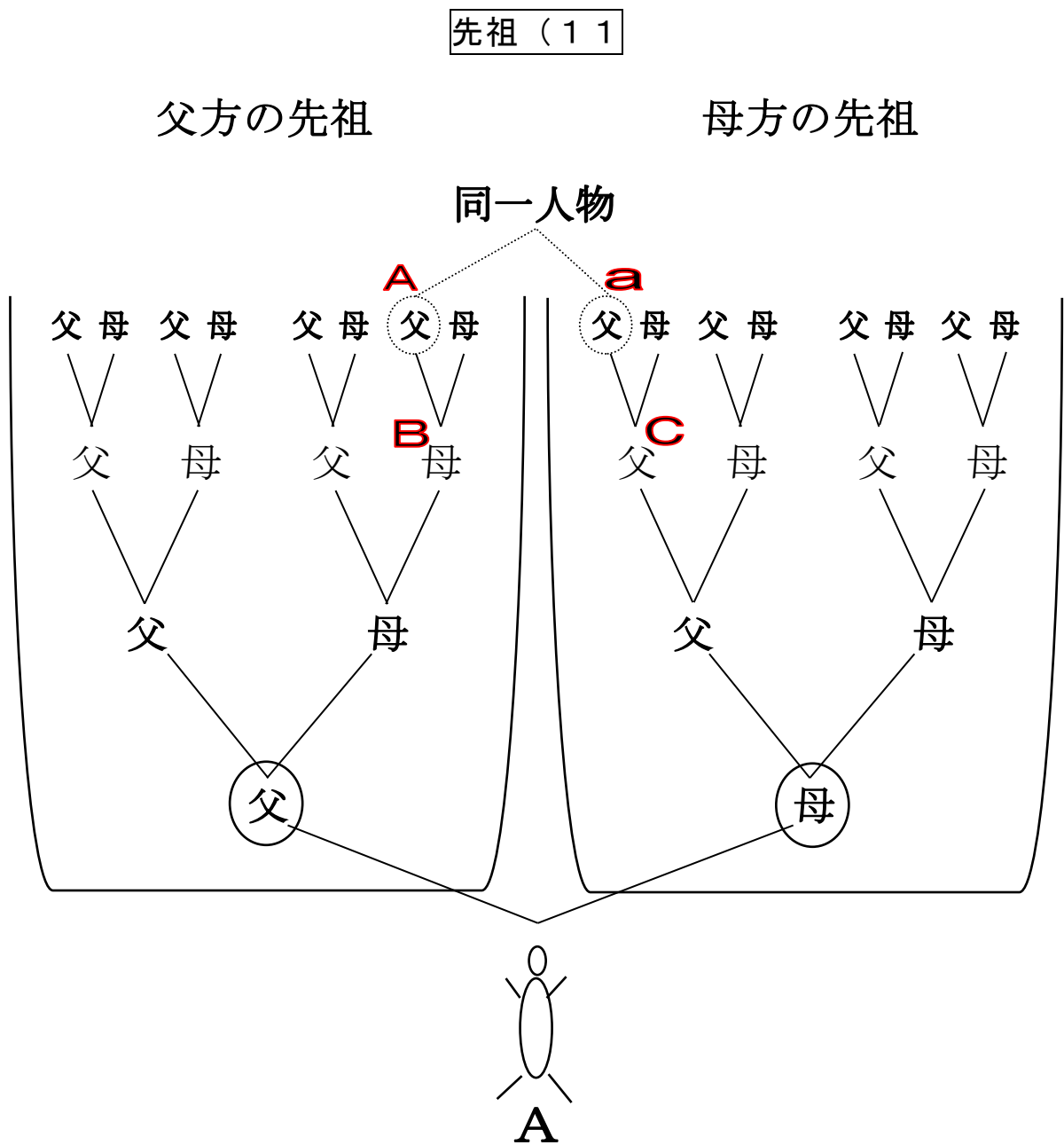
一兆人という数字は、地球上の人口をはるかに超えています。40代前の人口がこのような大きな数字ではないはずです。

何故、これほどに多くなり過ぎてしまうのか——ということになります。

そうしますと、現実的な数字にまで、減らすためには、どのような理由が挙げられるのかです。

一夫多妻もその一つと考えられます。

まず、わかりやすいのは「たとえば」ですが、このなかの、父方の曾曾おじいさん **A** と、母方の曾曾おじいさん **a** が、同一人物と考えることは可能です。



たとえばですが…… **A** おじいさんと、 **a** おじいさんは、同一人物です。一夫多妻ということで考えると、 **A** が

奥さんを二人もらったわけですね。

一方は正妻、一方はただの愛人、それでも構いません。

どのような理由であっても、**A** おじいさんと、**a** おじいさんは同一人物なわけです。

そうしますと、**A** と **a** が同一人物だとしたら、この人物の子供である **B** と **C** は異母兄弟ですね。

同一人物のお父さんから、生れた兄弟ですね。

**B** と **C** が兄弟だったら、この人の子供であるこの人と、この人の子供であるこの人は、この図式でいけば従兄弟です。

図に (**D E**) (**F G**) を書き加えてみてください。

ここがイトコだったら、この人の子供であるこの人と、この人の子供であるこの人は、ハトコ同士です。

このように続くはずです。

〔たとえば〕ですけど、話として……そのハトコですが、ハトコとは知らずに、知り合って結婚して、子供を生んでいるとすれば、ハトコ同士というのは一つの例でして、実際はもっと遠い親戚であったかも知れないのです。



ただ——少なくとも、この先祖たちのなかに、いま説明したような図式が、いかに多く含まれているのかということなのです。

それが、もう、あっちにも、こっちにもあるわけです。

あっちこっちにあって、絡み合<sup>から</sup>ってしまっている……

そのように考えれば、実際には、1兆人もの先祖は必要ないわけです。

理論的には、1兆人の先祖は必要ですけど、同一人物があっちにも、こっちにもいるわけですから……。

ここで考えてみて頂きたいのですが、現<sup>いま</sup>在、皆さんのなかで、ご結婚されている方は「自分とご主人とはハトコであるはずはない」そのように思っている方がほとんどだと想<sup>おも</sup>うのです。

そうしますと、何を根拠<sup>こんきよ</sup>にしてハトコというのか……、自分から見て、曾曾おじいさん、曾曾おばあさんの代、それらの代のなかで、先祖が1人でも共有していたら、ハトコになるわけです。

自分の曾曾おじいさんと、自分の妻の曾曾おばあさんが、

おなじ人物だとしたら、つまり、自分の先祖と妻の先祖のなかに同一人物がいるとすれば、それだけでハトコになります。

皆さんが、自分から見て〔自分の両親は、にハトコ同士ではないですよ。 他人同士で結婚しています〕と知っている方がほとんどだと想いますが、必ずどの人にも、曾曾おじいさん・曾曾おばあさんは、16人います。

自分の曾曾おじいさん16人と、〔例えば〕夫の曾曾おじいさん16人、もし全部わかったとしたら、もしかすると、そこに1人位は重なっているかも知れないのです。重なっていたら、もうハトコです。

その16人のなかの先祖が、たった1人でも重なっていたら、もうハトコです。

そこで重なっていないとしても、さらに一つ上の代にいけば、32人先祖が出ます。そうすると、そこでは1人位は重なっているかも知れません。その上は64人。

128…、256…、512…と、倍々に増えて行きますね。たどって行けば、いつか必ず重なります。

日本に1億2千万人以上の人口があり、その1人・1人に、これだけ膨大な数の先祖が、背景にいるとしたらどうでしょう……。

私の先祖も、こんなにたくさんいますし、皆さん1人・1人にも、こんなにたくさん先祖がいます。ということであれば、人口がいくらあったって足りないです。

ということは、いかに多くの人達が先祖を共有しているのかということです。

もう、日本人というだけで「私も皆さんも親戚ですよ」そういっても過言ではないでしょう。

まったく先祖を共有していないという人は、1人もいないと言い切ってよいほどです。もし、共有していないという人物が、いたとすれば奇跡です。

先祖を何代かさかのぼれば、必ず、そこには共通の先祖が出てくるはずで

しかし——それは記録にも残っていませんし、どこの誰かも不明です。ゆえに、知らないで男女が巡り合って、結婚して、また子供をつくっているだけなのです。

「人類みな兄弟」という言葉は、キリストとか、孔子とか、

ぶっだ  
仏陀とか、さまざまな説があるようですが、まんざら嘘  
ではないのです、  
兄弟とまでいかななくても、必ず、どこかで、つながって  
いるはずです。

うちは古い家系で家系図が残っていて、私の先祖の実家  
は源氏につながっているとか……私の先祖はもっとさか  
のぼると皇族につながっているとか、だから私は天皇家  
と親戚だとか、そうおっしゃる方もいるそうです。

これだけ膨大な数の先祖がいたら、このなかに1人位、  
源氏が混ざっていて当たり前でしょうし、1人位、皇族  
が入っていても当たり前です。

まったく入っていない人は、この日本で考えれば1人も  
いないと言い切れるはずです。

もし、まったく純血だとすれば、これも奇跡です。

それゆえに、40代さかのぼると、1兆人ではなくて、  
もっと現実的な数字にまで下がっていきます。

それにしても、膨大な数の先祖がいるという事実、それ  
に変わりはないのです。

☞ つぎは、<sup>にっかんし</sup>日干支 — <sup>さいしょうじくうかん</sup>最小時空間です。

「日干支」

さきほど——宿命のなかで「日干支」は最小時空間範囲

(一番短い時間の単位) です。そのようにいいました。

このことを人間に置き換えて“自分たち夫婦”とします。

日干支 — 自分たち夫婦



人間の最小集団である

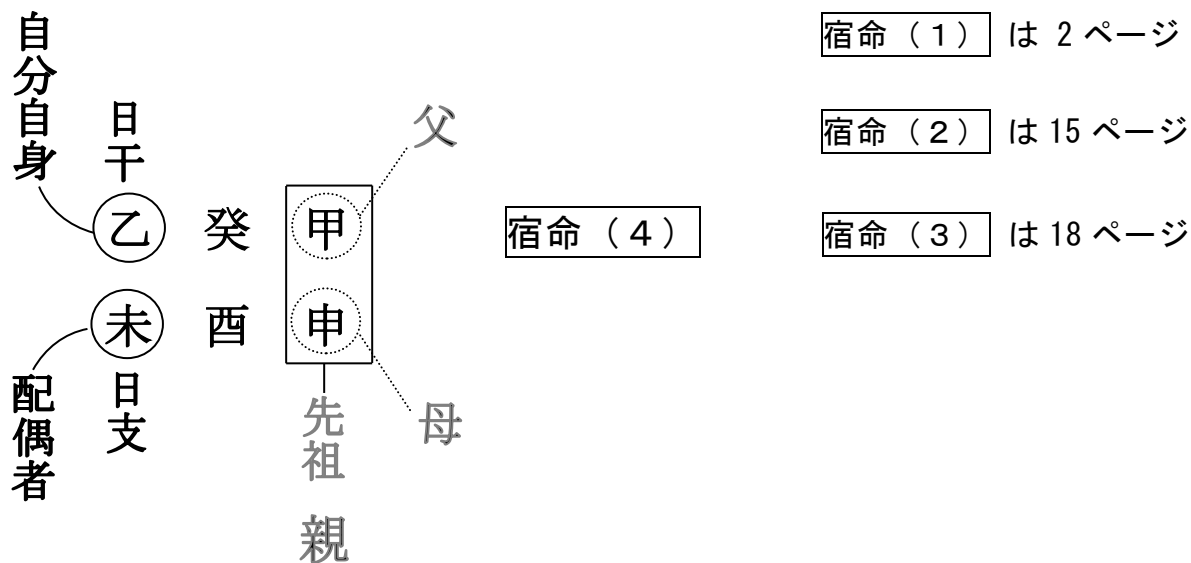
人間の集団のなかでは、“最小の集団は夫婦”だと考えています。

夫婦は合計で二人ですから、自分にとっての最小集団と考えます。二人よりも小さい集団はありませんよね。

兄弟の場合は、何人いるのかわかりません。

親と子の場合でも、子供が生まれて家族を形成します。

二人という最小集団である夫婦は、最小時空間に位置しそれは「日干支」だと考えています。



自分自身が〔男〕とか〔女〕とかではなくて、あくまでも、**宿命(4)** は自分の宿命です。

「自分自身の宿命」です。

自分にとって、自分自身は、当然（陽）です。

陽的立場ということで、自分自身が上に位置します。

そして、自分の配偶者（結婚相手）が下に位置します。

☞ 〔上がよくて〕〔下が悪い〕とか、あるいは〔上下の差〕という考え方は、一切ありません。

「夫婦は同等である」と考えています。

このことは勉強が進みますと出てきます。

日干支「乙未」の姿は、自分と配偶者とで、一つの組をつくっているというふうに考えます。夫婦はペアです。

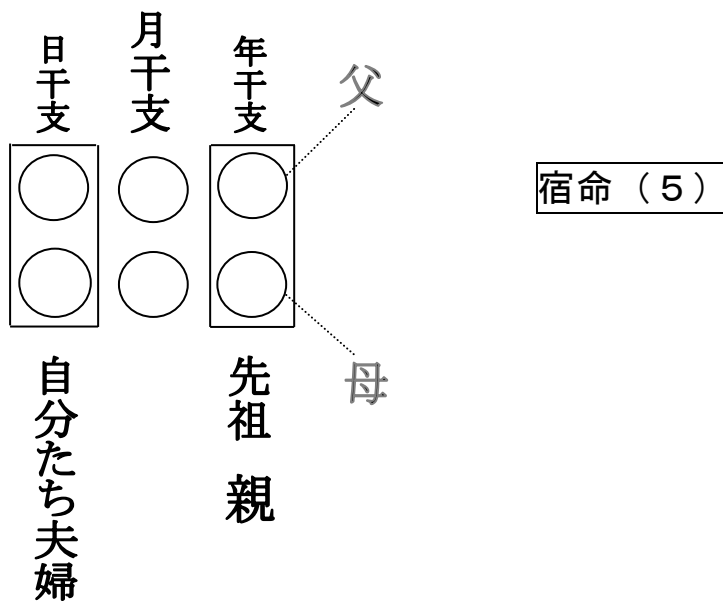
☞ 最後は、<sup>げっかんし</sup>月干支 — <sup>ちゅうじくうかん</sup>中時空間です。

### 「月干支」

「月干支」はやや難しいです。

「年干支」先祖の場・親の場所

「日干支」自分達夫婦の場所



「月干支」には、先祖でも、親でも、夫婦でもない人達が入ります。

ここでは（月支）のほうから、まずは考えていきます。 ➡

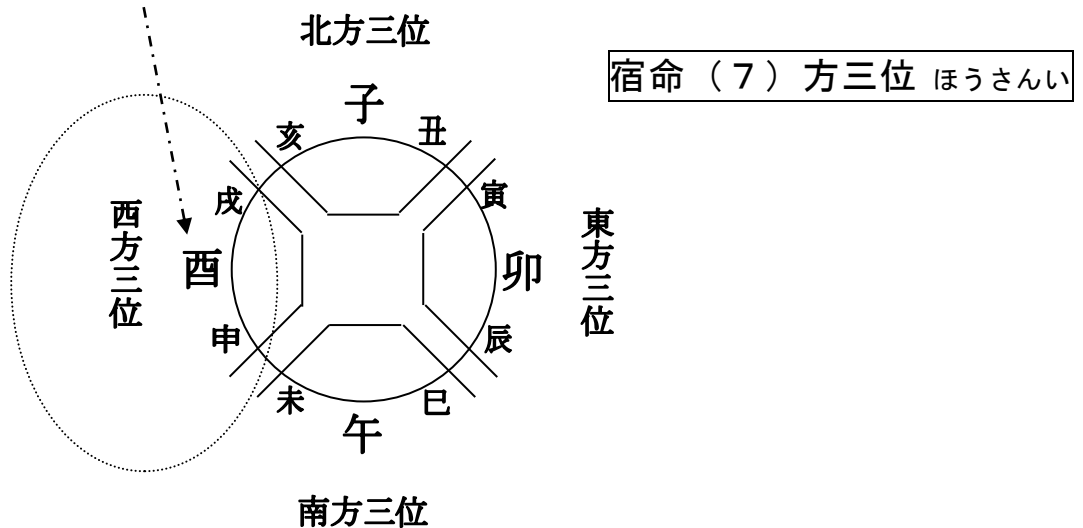
ここでは（月支）のほうから、まずは考えていきます。

日 干 支	月 干 支	年 干 支	
乙	癸	甲	宿命（6）
未	酉	申	

「月干支」を「月干」と（月支）の二つに分割すれば、もともと（月支）は季節をあらわします。

宿命のなかでは、（月支）が季節をあらわしています。

この人は酉月に生まれています。



ほっほう 北方・冬の十二支は（亥 子 丑）      とうほう 東方・春の十二支は（寅 卯 辰）

なんほう 南方・夏の十二支は（巳 午 未）      せいほう 西方・秋の十二支は（申 酉 戌）

せいほう      とり  
西方に位置する（酉）は秋の十二支です。



酉月に生れていますから、季節は秋です。

【初年】 8回目【十二支と陰陽論】 01 ページ【十二支と季節】 図A を参照ください。

☞ このことは、とても大切です。

7月に生まれたから〔夏生まれ〕だとか……9月に生まれたから〔秋生まれ〕だとか……そのように判断するのではなくて……、正確には、宿命の（月支）にでている十二支で（生まれた季節）を判別します。月支の十二支で判別してください。

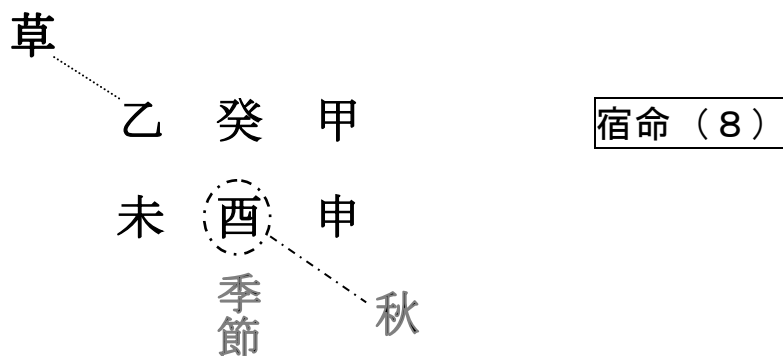
宿命（7）方三位 ほうさんい の十二支盤に書かれていますように、宿命の月支が（亥月）（子月）（丑月）であれば〔冬生まれ〕ということになります。

ここでの月支は（酉月）ですから〔秋生まれ〕になります。

ご自身の宿命をだして、月支の十二支が（寅）であれば、生まれた季節は 春 になります。

ご理解いただけましたでしょうか……とても大切です。

☞ 宿命を書きなおしました。



この人は、日干が「乙木」です。

「乙木」を自然界のものにたとえると、草木や穀物とかでした。その見方がありました。

🔍 34回目【人体図の出し方】05頁 参考資料 を参照ください。

そうしますと、この宿命の人は、おなじ「乙木」でも、  
（酉月）に生まれた乙木ですから、秋の草です。

この人は秋生まれの草です。

秋の草にとっては——〔なにがあるとありがたいのか？〕

〔なにがやって来ると、この草は枯れてしまうのか？〕

そういうふうになんか考え・想いうかべることで、占いに発展して行くわけです。

その観方はまだやっていませんが、これから出てきます。

この宿命の月支は（酉月）なので、季節は秋です。

秋の草にとって、秋という季節は、どのような意味合いをもっているのでしょうか……。

この宿命の人物「乙木」は秋の草ですよ。

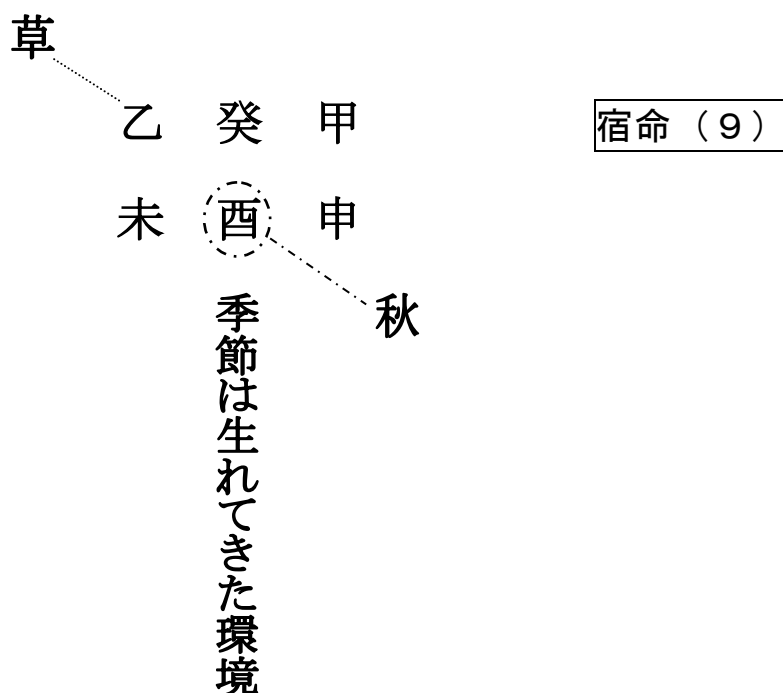
乙木（草）にとって、季節というのは、生れてきた環境をあらわすものですよね。

草にとって、季節は生まれてきた環境そのものです。

冬生まれの草の人もいます。 春の草の人もいるわけです。

おなじ草でも〔春夏秋冬〕のなかで〔どの季節に生れて来たのか……〕このことは、草木が生きていくうえで、とても大切なことになります。

季節は「乙木」が生れてきた環境です。



日干「乙木」の人でも、冬の草の人もいれば、夏の草の人も、春の草の人もあるわけです。

その季節は、草が生れてきた環境を現しています。

月支が（丑）であれば、冬の草です。

このように、（月支）は、生れてきた環境をあらわす場所になります。

この話を人間に置き換えれば、この人が生れてきた環境を現し、そのなかでも、最も重要なものは『家系』であると、算命学は考えています。

（月支）は家系をもあらわします。

この「乙木」は、秋という環境に生れて来たわけです。この草にとって、冬が来ても、春が来ても、夏が来ても、秋に生まれた草という事実は、枯れて死ぬまで<sup>か</sup>変わらないのです。

それとおなじで、人間の世の中でいえば、この人「乙木」が、どんな家に生れてきたのか、それは一生を通して替わりません。

それは自分の<sup>りっち</sup>立地であり、自分の家系であるからです。

〔たとえば〕100人のおなじ生年月日の人間がいても……  
各個人はさまざまな家（家系）に生まれて来ます。

安倍さんという人が、どのような家に生まれてきても、  
生まれて来た家で育つわけです。

人間は自分が生まれた家の環境で成長するわけですから、  
その環境は成長の過程で、人生にもものすごく大きな影響  
を与えます。重要な結果をおよぼす要因にもなります。

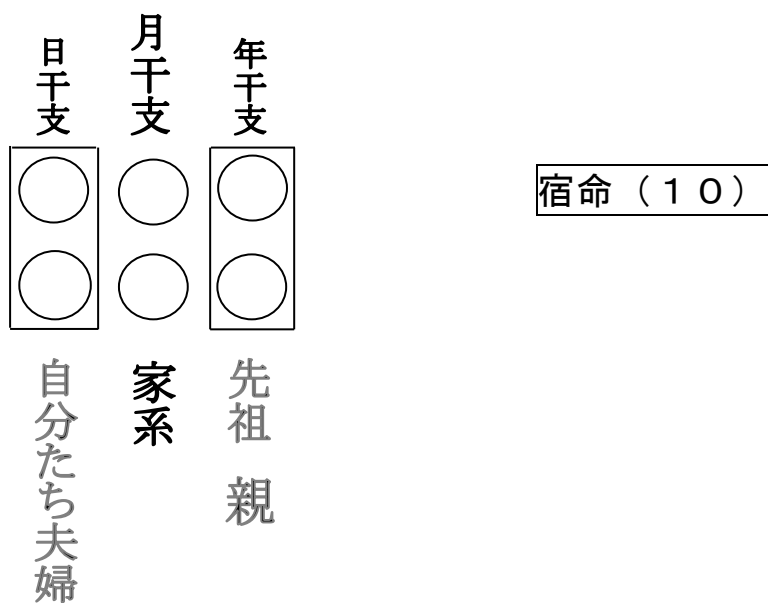
いま  
現在の家に、自分が生れてきたから〔このような育て方  
をされて〕〔こういう育ち方をして〕生きてきたわけです。  
もし、別の家に生れていたとすれば、自分の人生は大き  
く変わっていたはずです。

このことは、誰にでも当てはまります。

庶民の家に生れるのと、大金持ちの家に生れるのとでは、  
人生は全然違いますよね。どちらが〔良いのか〕〔悪いの  
か〕それは宿命によりますから、ここではわかりません。

普通の家で生れて来ると、皇族の家に生れるのとでは、  
人生はまったく違ってきます。

それゆえに、どういう家系に、どういう環境を背負って  
生まれて来たのかを意味するのが、宿命では月支です➡



(月支)は「家系の場所」として、占いをしていきます。

(月支)は自分の立地(生まれた季節・環境)でもありま  
すので、その意味合いをつかって、占っていきます。

これから先々において、自分と家系の繋がりを観ていく  
ようにもなるでしょう。

自分は家系にとって [どういう役目をもっているのか]

自分の宿命は [家系から離れるほうがよいのか……]

[家系から出ないほうがよいのか……] そういう占いに  
発展していくようになります。

☞ 最後は「月干」です。

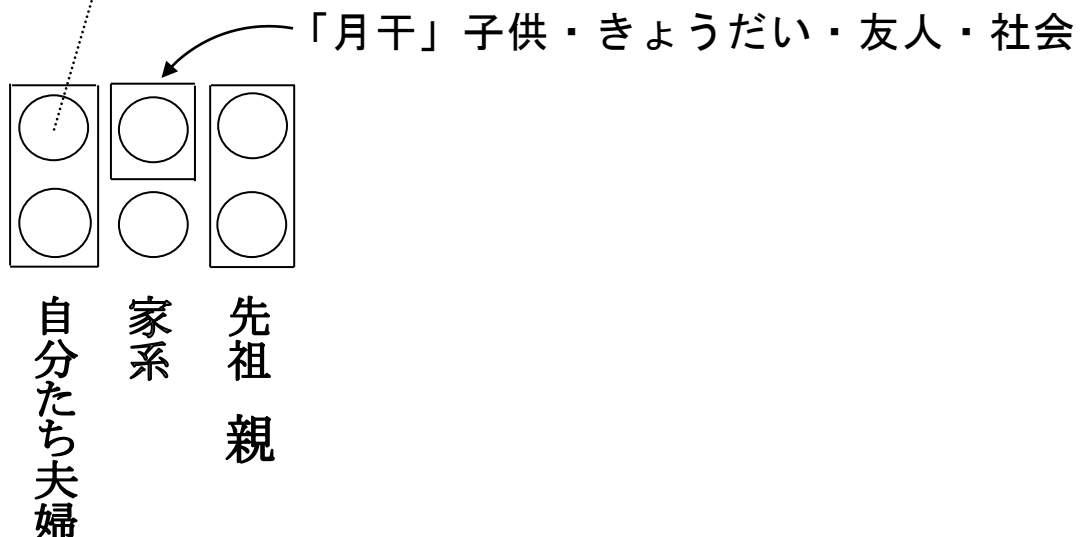
「月干」

「月干」は、先祖でも、親でもない、家系でもない——自分たち夫婦でもない人達、そういう人たちは、すべて「月干」に含まれます。

「月干」には子供も含まれますし、兄弟も含まれますし、あるいは、人生を歩むなかで、友人なども含まれます。そして、社会に出れば、社会の人達とも多くのつながりをもって生きて行きます。それゆえに“は社会の場所”というふうにも考えます。

「日干」をAさんとすれば、「月干」はAさんの社会の場所になります。

宿命 (1 1)



ただ—— 宿命 (11) の「月干」のなかには、子供・兄弟もいれば、社会の人達の友人もいれば、上司もいれば、同僚もいます。

そういう人たちも含めて、そのなかで、**A**さんという人にとって、最も大きく影響してくると想われる人物は誰なのかと考えますと、一般的に“子供”でしょう。

その人物の生き方によっては、<sup>えん</sup>縁が深くて影響を与える兄弟もいるでしょうが、一般論としては、兄弟は子供の頃は家族ですが、大人になったら一緒に暮らしません。

将来的には、兄弟は家族ではなくなり、親戚になります。ところが子供は、その子供自身の生き方にもよりますが、一生一緒に暮らすかも知れないのです。

兄弟と比べると、そうなる場合が多いはずです。

自分の跡継ぎになるかも知れないし、先々自分の面倒を  
み  
看てくれる、ということもあるでしょう。

どのような子供が生まれるのか…… [親思いの子なのか]

[優秀な子なのか] [親と一緒に暮らさないほうが子供にとって



はよいのか？ ⇒ ことについては親子の宿命によります] ……

さまざまな親子の状況があるわけですが、いずれにしても、Aさんの人生は、生まれて来た子供の影響を受けるようになります。(このことはどなたにとってもおなじです)

それゆえに、最もその人の人生に大きな影響を<sup>およ</sup>及ぼすと思われる人物は、子供だと考えています。

このような意味合いから、「月干」はその場所の代表者として「子供の場所」というふうに考えておいてください。

☞ 実際に占うときは、その案件の状況によって異なります。兄弟の場所として観たり、友人の場所として観たり、社会の場所として観たり、国家占法では政府と位置づけて占ったりすることもあります。

さまざまに応用しますが、主としては“子供の場所”です。

☞ 最終的につぎのように考えておいてください。

「年干」父親の場所 —— (年支) 母親の場所

「月干」子供の場所 —— (月支) 家系の場所

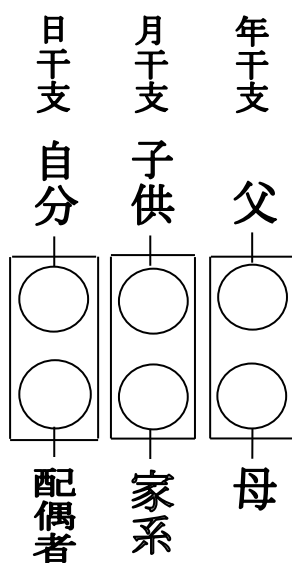
「日干」自分の場所 —— (日支) 配偶者の場所

☞ 最終的に、つぎのように考えておいてください。

「年干」 父親の場所 —— (年支) 母親の場所

「月干」 子供の場所 —— (月支) 家系の場所

「日干」 自分の場所 —— (日支) 配偶者の場所



宿命 (1 2)

占うときには、主として“人物の場所”として観ます。

宿命 (1 2) の人物の場所が、占うときの最も重要な観方とおもってください。

6つの人物の場所は、ぜひ覚えていただきたいのです。

この6つは覚えるものと思ってください。お願いします。

といいいますのは、「陰占の占い」に入っていくようになりますと、これらの場所をつかいます。

通常の占いにおいて [たとえば] 「私、今度結婚をしますけど、どうでしょうか？」とか、「子供ができたのですが、どうで

しょう？」とか、「別な仕事をしたいのですが、どうでしょう」  
とか、そのようなときに……6つの人物たちに全く関係し  
ないで、占いをするということはまずないのです。

〔たとえば〕「新しく仕事を始めようと想うけど、どうで  
しょう？」とかの場合であれば……、

〔親に半分出資してもらおうとか〕〔現在の会社を辞めて、親の仕  
事を継ぐとか〕あるいは〔親の仕事を手伝っているけど、辞め  
たいとか〕とかの案件があるとすれば、そこにはさまざま  
な理由が存在するでしょう。

占うときに、「現在、親との関係はどうなっているのか」  
ということを観る場合もあります。

あるいは、配偶者が関係してくることもあるでしょうし、  
自分の子供の運勢が関係してくる場合もあります。

占いをしますときには、必ず、といってもよいくらい、  
人物の場所をつかいます。

それゆえに、覚えなければいけない「場所」と「人物」  
である。そのようにおもって頂きたいのです。

【初年】 38回目【陰占宿命】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 39回目【おうそうきゆうしゆうしほう旺相休囚死法】です。